

武蔵野納税貯蓄組合総連合会 優秀賞

税金について知ったこと

鷹南学園三鷹市立第五中学校

三年 堀崎 るの

中学生である私の生活は、国民が納めている税金で成り立っています。しかし、私は税金がどのように使われているのか知らないまま、税金に生活を支えられてきました。

私は小さい頃から母子家庭で育ちました。そんな私が周りと同じ様に学校で学び、十分な食事を取り、幸福度の高い生活を送れているのは、「児童扶養手当」を受けているからだとなりました。これは、母子父子家庭で生活する子供が18歳になる日以降の最初の3月31日まで給付され、税金で賄われている社会保障制度です。今までは、税金に対して、増税によって生活が苦しくなるなどの、悪い印象が強かったのですが、「児童扶養手当」の存在を知ったことで、税金に対する考え方が大きく変化しました。

社会保障制度について、もっと詳しく知りたいと思い調べてみると、私たちの生活の大部分は、この社会保障制度によって支えられていることが分かりました。例えば、母子家庭の私は学校の給食を無償で食べられたり、来年から通う高校の授業料が免除されたりします。さらに、学生である私たちだけでなく、母子家庭で大変な思いをしているお母さんや、定年で働けなくなったおじいちゃんおばあちゃんも、社会保障制度によって支えられています。このように、私や私を守り育ててくれる人たちの今や未来を、税金が守り、支えてくれているということを知り、税金は大切に、必要なのだと分かりました。

今回この作文を書くにあたって、税金のことについて気になったことは全て調べました。調べてみて、今までの私は消費税こそ納めていたものの、特に何も考えずに、ただただ税金や社会保険制度の恩恵を受けていたことが分かりました。しかし、間接的ではありますが、一国民である私が税金を納めることで、自分や自分の周りの人だけでなく、国民全員の今や未来を支えるほんの小さな力になれると思います。私たち中学生は、税を納めるというよりは、税に支えられている立場であるという認識が強いと思います。さらに中学三年生という今、税金のおかげで学校に通うことができ、進路実現に向けて努力することができています。だから、将来自分の夢を叶えて、社会人という立場になったときに、今私たちが学生として支えられている分、しっかりと税金を納めて、自分の大切な人の今や未来を支えられるようになればいいなと思います。

武蔵野納税貯蓄組合総連合会 優秀賞

「劇団を支えてくれた税金」

学校法人明星学園中学校

二年 一之瀬 心菜

私は、小学4年生のころからミュージカル劇団に所属しています。年に1回公演を行っていますが、初舞台の年は2020年。コロナがはやり出したので舞台の幕をあけることができませんでした。はじめての舞台をすごく楽しみにしていましたが、三密をさけるためにも公演をじしゅくしなければならなかったんです。

2020年の夏の公演はえんきになり、2021年4月20日に同じ演目を公演する予定でした。でも、その日から緊急事態宣言が出され、その日も幕をあけることができませんでした。

そんな時、文化庁の芸術活動の継続支援事業の助成金が私たち劇団を救ってくれました。この助成金は、「新型コロナウイルスの感染拡大のえいきょうにより、舞台の活動自粛を余儀なくされた文化芸術関係団体において、今後一層の感染対策を行いつつ、活動の再開に向けた準備を進める必要がある。」と言うもので、何度も会場が使用できなくなったり、マスクなどの感染対策など金銭面でとても助けになるものでした。この助成金と言うものが、税金から成り立っていると知り、はじめて税金が身近に感じました。

それは私の中で税金は悪くつかわれているというイメージが強くあったからです。スーパーとかコンビニに行くたびに物の値段があがっていたり、政治家があそぶために使っていたりと言うイメージです。

私は舞台に立つのが大好きです。コロナ禍は、思うように公演ができなくてくやしい思いをすることがたくさんありましたが、たくさんの劇団員の仲間とはげまし合いながら練習をつづけることができました。これも、助成金がもらえなければ、場所を貸りることもホールを貸りることもできなかったかもしれません。

今年は、体調不良で降板してしまった昨年の分も楽しく、そして堂々と舞台に立つことができました。舞台から見るお客様のかんせいはとても心地よく、幸せな時間です。これも、あの時、文化庁が出してくれた、助成金と言う税金のおかげです。この感謝の気持ちを忘れず、これからも一生けんめい練習をつづけていきたいと思います。

武蔵野納税貯蓄組合総連合会 優秀賞

新常識と税金

東京都立三鷹中等教育学校

三年 井上 はぐみ

2020 年。まるで時間が止まってしまったような感覚だった。学校の休校から始まり、イベントの中止、飲食店の休店や時間短縮、酒類の提供禁止、テレビの収録もできず再放送、再放送、再放送。ニュースをつけても、毎日同じ専門家が四六時中「コロナコロナコロナ」と。誰もが「このまま日本は（世界は）どうなってしまうだろう」と強い不安に襲われ、「当たり前」の大切さを心底感じ、一刻も早く「当たり前」が戻ることを願った。しかし、簡単に戻ることはなく、むしろ「当たり前」がコロナ禍の新常識、と常識ごと変わっていった。皆、人生の大事な時間が奪われてしまったことに変わりないのだが、人によっては死活問題に繋がる人もいた。

私の父はデザイナーである。デザイナーといっても有名な「ファッション」のデザイナーではなく、Web サイトやパッケージ、イベントのビラや販促物の作成を主に行っていた。しかし、コロナの影響でイベント自体がなくなってしまったため、同時に父の仕事もなくなってしまい、収入は壊滅的になってしまった。その時、国や都が税金を使って、父のように収入が減ってしまった人向けに助成金や給付金で補助をして下さった。父は区役所等を往復して受け取った。おかげで、事業を拡大したのもあるが、その会社は今も続けられている。それよりなにより、私たち家族もしっかりとご飯を食べ元気に生活している。父と母も「こういう時日本は強い」と言っていた。それはやはり日頃から国民の一人一人が税金を払っているからだろう。

コロナ禍の時だけではなく、私たちの「当たり前」も税金で支えられているものが多く存在する。誰も直接お願いして、直接お金を払った訳ではないのに警察がパトロールして安全を確保したり、法律を破ってしまった人を更生して日本の治安を守ったりなど、誰も「公園をパトロールしてほしいから、1 回 5 万円払おう」などしていないのに、日本にとって必ず必要な仕事をしたりして下さっている。安心して飲めている水も、住んでいる家も必ず税金が絡んでいて、誰も全員が支える立場（支払う立場）にも支えられる立場（直接的にも間接的にも支払われる立場）にもなる。

税金とは、国民の一人として、国のため、誰かのため、自分のために必ず払わなければならないものを皆で協力して出し合う、国規模での支え合いである。

最近ニュースを観ると、支援や手当て、サービスが他国と比べて充実していないのではないかという声や、少し税金が高すぎるのではないかという様々な声を聞く。勿論、サービスと額どちらをとっても、片方に支障をきたす。日本にとって一番良い税金のあり方は何なのか、私ももっと勉強に励み、いつか国民全員が、その問題に向き合って、平和に答えを導くことのできる国になれると良いと思う。